

# 図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2011. 1.11

主な内容	頁
『最近のお天気事情』（寄稿）・・・地球海洋学科 小林文明 .....	(397)
文書保存体制の整備について・・・元人間文化学科 田中宏巳 .....	(401)
教官推薦著書の紹介・・・・・・・・・・・・・体育学教育室 三村由紀 .....	(402)

## 『最近のお天気事情』

地球海洋学科

小林文明

このところお天気に関する話題に事欠かない。この夏(2010年)の猛暑(敢えて熱害と呼んだ方がいいかもしれない)の例を挙げるまでもなく、豪雨、竜巻、落雷、熱波、寒波など、シビアーな現象が次々と襲いかかってくるようである。ちょうどこの原稿を書いている今日(12月3日朝)も猛烈な雨と風で、鎌倉市内では竜巻が発生し多くの住宅で被害が発生している模様である。世界の自然災害による経済的ロスの大半が風水害であるという試算もあるように、先進国、途上国を問わず、このような大気擾乱は人類共通の課題であることには間違いない。わが国では戦後、天気

予報の精度向上や治水対策、住民意識の向上などにより、1個の台風で数千人が亡くなるということは近年なくなったが、社会の高度化に伴い被害は拡大しているといっても過言ではない。

もうひとつの問題は、豪雨や竜巻など現象そのものが増加傾向にある点である。この原因には、地球規模の気候変動に加えて都市の温暖化(ヒートアイランド)の影響が大きい。1980年代までは夏の気温が35℃を超えると記録的な暑さであり、40℃というのは空想の世界に過ぎなかった。また、最低気温が25℃を下らない熱帯夜の日数は年々増加し、都心

では最低気温が 30℃を下らない、“超熱帯夜”を記録するようになった。桜の開花日は早まり、夏から冬へ急に変わり秋が短くなったと感じているのは筆者だけではあるまい。気候はさまざまな外的な要因で変わるが、人為的な要因で近年大きく変化している。さらに気候変動は、季節感の喪失などの文化的な面にも大きなインパクトを与えることになるだろう。

今年も各地で集中豪雨による被害が相次いだ一方で、台風の発生数は過去最低レベルであった。このように気候変動と局地的な大気現象の因果関係には未だ不明な点が多い。今年の夏にしても、梅雨明け前には、「このまま不順な夏になるだろう」という予想もあった中で、この猛暑を定量的に明言した人は皆無だったことから、天気予測の難しさがわかる。今回お話を頂いたのもこのような背景によるものと理解し、以下最近の話題でもある、“ゲリラ豪雨”と竜巻について触れたい。

### “ゲリラ豪雨”

“ゲリラ豪雨”という言葉は、2008 年夏から広く一般で用いられるようになり、その年の流行語大賞にもノミネートされた。2008 年の夏は、安定した夏型の気圧配置が少なく前線や低気圧が日本列島周辺に居座ることが多く不安定な状態が続いたため、積乱雲の発生が活発になり連日各地で局地的な強雨が観測された。いわゆる夕立とは異なり、時間や場所を選ばず積乱雲の急激な発達が見られたため、神戸市や東京都内など増水した川での事故が相次ぎ、このような言い回しになったと思われる。梅雨末期の集中豪雨が積乱雲の集まりである数 100km のスケールを有する雲の塊によりもたらされるのに対して、1 個の積乱雲すなわち数 km 程度のスケールの雨を指すと推測されるが、学術用語ではなく明

瞭な定義もない。尤も、「集中豪雨」も、もとはマスコミ用語であったものが現在は学術用語として定着している。

1 時間に 100mm を超えるような尋常でない雨が降ると、いたる所で被害が生じる。特に都市は豪雨には脆弱であり、都市型洪水としてその対策が講じられている。このような災害は、都市化という受け皿の変化だけではなく、都市での雨の降り方そのものも変化している可能性がある。夏季、都心で沸く積乱雲を観ていると、都会生まれの積乱雲はより発達するのである。

### 竜巻

竜巻(トルネード)といえば米国がメッカであり、その発生数は年間 1000 個とも 2000 個ともいわれている。近頃はトルネード・ツアーなる観光も企画されているほどである。一方、わが国ではこれまで年間 20 個程度といわれていた。竜巻のような極めて短時間で小スケールの現象は、顕著な被害がでない限り特定することは難しく、発生実態は不明な点が多い。2005 年から 2006 年にかけて、羽越線事故や北海道佐呂間町、宮崎県延岡市で発生した竜巻により甚大な被害が生じ、社会的関心の高くなったここ数年、竜巻の発生数は 100 個を超えた。わが国では人口の集中する海岸線で発生することから、竜巻の発生密度、被害のリスクは米国と比べて決して低いとはいえない。単純計算では、一人が竜巻に遭遇する確率は 10000 年に一度であるが、一方で 2 年続けて竜巻の直撃を蒙ったお宅も報告されている。

積乱雲の中で竜巻の親渦が形成される過程はだいぶ解ってきたが、漏斗雲で可視化される直径 100m 程度の渦が雲底から地上に到達するメカニズムは完全に解明されていない。竜巻は極めて局地的な現象であるので、現地

被害調査は学問上で重要であり、筆者もよく現地調査を行う。最近、災害派遣が要請され、被災現場で迅速に行動される隊員の姿を拝見することが多く、誇らしく思いつつ調査にあっている。わが国では年間を通じて竜巻が発生し、その原因は台風、梅雨前線や降雪雲など多岐にわたり、米国のトルネードと日本の竜巻とはかなり異なるようである。

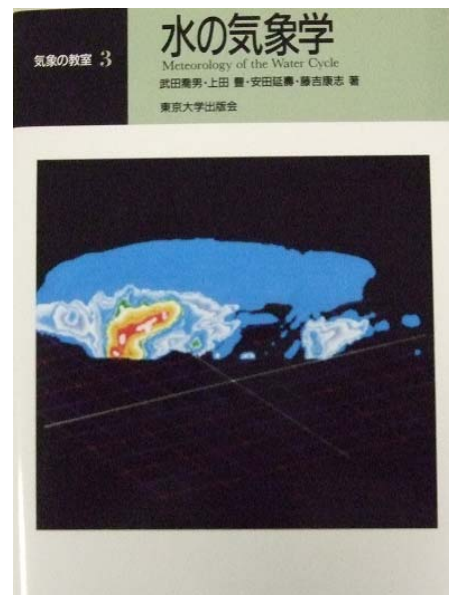
### 雨冠の科学

積乱雲の研究は換言すると、雨、雪、雹、霰、雲、雷など雨冠の気象学といえる。“雲を掴むような話”という言い方があるが、本家本元の業界では次第に雲を掴めるようになりつつある。これは、積乱雲を構成する雲、雪、雹などの粒子の構成(これを雲物理学という)や、積乱雲内の力学構造(雲力学)が判明してきたからである。このような学問の発展には、雲の中の観測だけでなく、レーダー等を用いたりリモートセンシング(遠隔測定)技術による観測によるところが大きい。現在から10分後の予測を、通常天気予報と区別して、短時間予測(ナウキャスト)とよぶが、積乱雲を捉えて構造を明らかにすることで、都市型豪雨や竜巻などのナウキャストも可能になるであろう。

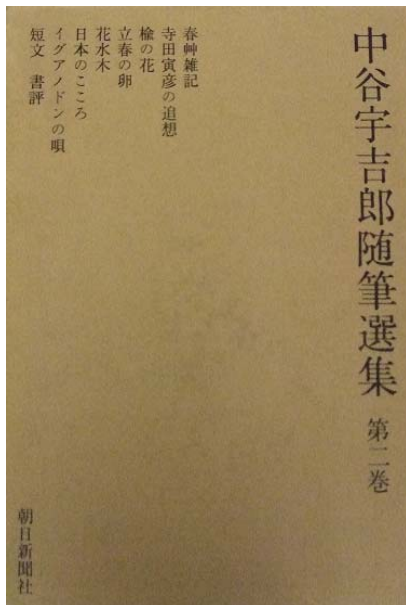
このようなシビアーストーム(嵐)は、一般市民にとっても関心の高い問題であるとともに、学生諸君にとっても将来、災害派遣や航空機の離発着など直面することがあるに違いない。忙しい防大生も偶には空を眺め、本を手にとってみては如何でしょうか。お天気に目覚めた人には気象予報士の道が待っています。末筆になりましたが、本稿執筆を薦めて頂いた関係各位、お世話になった編集委員の皆様にお礼申し上げます。



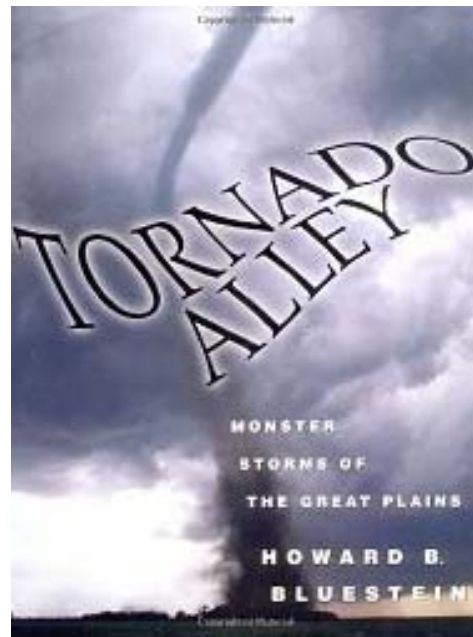
戦時中に行われた、ニセコ山頂での着氷実験や消霧実験から、最近の都市型豪雨まで、研究の歴史がよくわかる。続編「雪と雷の世界」も刊行されている。



降水、降雪、氷河など地球上の水に関する入門書。降雨のメカニズムがわかりやすく説かれている。



「雪は天から送られた手紙である」ということばは有名である。2000年に生誕100年を期して岩波書店から中谷宇吉郎集（全八巻）が刊行されている。



英文の学術書であるが、至近距離から撮影された多くの写真はみるだけでも価値がある。



ダウンバーストの発見者でもあり、Fujita スケールは竜巻の被害スケールとして世界で用いられている。



雲、空、霧、雷、虹、風などの写真集も数多く出版されている。

## 『文書保存体制の整備について』

元人間文化学科 田中宏巳

30年近く前、タイ王国の留学生2人を連れて東京見物に出かけた。武道館から毎日新聞社横の地下鉄入り口に向かう途中、道路の向こう側に国立公文書館が見えたので、「あれが、日本の公文書館だ。」と説明したところ、2人は信じない。「日本のような大国の公文書館があんなにちっぽけであるはずがない。タイ王国のそれより遥かに小さく、出身地の田舎の文書館の方がまだ大きい」といって、冗談扱いされた。今日でこそ筑波に立派な「うつわ」が出来たが、わずかな人で動かしている現状を見ると、胸を張れるような中身ではない。おそらく、日本の公文書保存レベルは、中進国にも入れてもらえないし、発展途上国と比べても下位の部類というところだろう。

なぜ、日本で公文書の保存と公文書館の強化に関心が持たれないか、その理由はわからない。行政が文書主義でないことに原因があるという指摘があるが、縣市等の地方行政機関で比較的良好な保存体制ができていた諸例を見ると、そんな理由だけでは割り切れない。もっと根深い理由があると考えがちだが、明快に答えた人が誰もいないところを見ると、実は何もないのかもしれない。アメリカ合衆国で公文書を残す理由を質問したとき、当たり前のことについて、「いちいち説明を求める意図が理解できない」と言われたことがある。要するに愚問なのである。だが、日本では、「なぜ公文書の保存が必要か」について国民を説得し、理解してもらおうという世界にも例がない努力を積み重ねなければならない。

戦前に比べ、一層ひどくなった戦後の文書扱いも、近年ようやく変わりつつある。その

原因こそ国際化の波である。諸外国の文書保存の実情がわかるにつれ、我が国のその面の著しい不備が痛感されるようになった。しかし日本では、なぜ残さねばならないか、どうしても説明が必要らしい。古代から人類の獲得した知恵の倉庫が図書館といわれるが、それにしばしば対比される文書館は人類が積み重ねてきた経験の倉庫である。それ故に図書館と文書館は性格と目的において一線を画す。知恵は残しても、経験は残さなくてもいいのかというのが、文書保存、文書館設置の原点であり、必要論の根拠である。また俗っぽい理由をいえば、文書保存を怠ることは履歴・前歴を消し去る行為と同じだが、前歴を消すのは何かいわくがある特殊な場合が多く、前歴を消し去る者に誇りなどあるはずがない。

公的機関では毎日沢山の文書が作成され、業務が執行されて、一日一日の歴史が作られていく。しかし、実施後、思いもかけない絡み合い、環境や社会情勢、ちょっとした出来事によって、最初の意図や思惑と異なる方向に進むのも世の常である。どうして変わったのか、どう変わったのか、検証することは組織に係わる者の責任である。ワシントン・DCからリッチモンドに行く途中にある米海兵隊歴史資料センターの所長が、直面している問題の背景や原因は、数年前からの報告書を追跡すればだいたい突き止められるが、教育や精神的な問題などは十年、二十年前から兆候が現われはじめる傾向があり、そのため関連文書を整理し、利用できる状態にしておかねばならないと話してくれたことを思い出す。時間軸の中で醸成される変化を追及する手法

は日本社会では根付かず、これが文書保存の立ち遅れの一要因とも考えられる。

筆者は三自衛隊の史(資)料館に関係した唯一の経験者だが、わかったのは文書・資料保存について語るべきものが何もないことである。

いずれも文書の処理規定に基づき適切に対応し、法的にまったく問題がない。だが法にしたがっていけばそれで十分というわけではない。たとえば、公的機関がそれぞれの歴史を書き残さねばならないという規定はどこにも存在しない。三自衛隊の史(資)料館も、法が設置を規定しているからではない。おそらく、歴史を残さなくてはならないという意識がどこかに存在していたからに違いない。法が歴史について規定しなかったのは、それは常識であると考えられたからであろう。

それならば本校はどうであろうか。文書を残すことと、歴史を書き残すことがリンクしているわけではないが、文書を残す必要性は理解されつつある。防衛省内で模範を示すなどという気負いはないが、すでに数年前から準備に着手し、文書の収集と整理を進めている。長期にわたってコツコツと積み上げ

る作業が多く、転勤が少ない職員が多い本校は有利である。また三自衛隊よりも、文書の整理や扱いに慣れた職員が多い本校が実践するのも理に適っている。我が国では、文書に無関心な人でもすぐに公開を口にするが、まず、収集・整理・保存の体制を整え、しかるのちに公開等を議論するのが正当な文書業務の在り方というものである。この考えに従えば、まだ公開を検討する段階ではない。

ほぼ陸軍士官学校の在任期間と並んだ本校には、それこそ無数に近い構想や計画があり、あるものは実現し、あるものは消えていった。その背後には、関係者の血の滲むような努力、悲喜こもごものドラマがあったはずだが忘れ去られてしまった。いま現在、本校の発展のために各職員が取り組んでいる努力も、これまでと同じ文書扱いを続けるならば、数年ならずして周囲から忘れられてしまうが、それではあまりにも寂しくむなしい。

(文責 田中宏巳)

## ~~~~~ 教官推薦著書の紹介 ~~~~~

『カウンセリング心理学入門』

著者 國分康孝 PHP新書

紹介 体育学教育室 講師 三村由紀

カウンセリングという言葉が、日常的に使われるようになっていく。皆さんの想像する心理学的なものだけでなく、化粧品や育毛やエステ、はたまた占いも「無料カウンセリングします」といううたい文句によって宣伝されている。本書はそれを否定することなく、

むしろ「好ましい」としており、それは、『カウンセリングは「ふつうの人々」が気軽に相談にのってもらえるらしいというイメージが普及・定着するから』であると。

そして、著者はプロローグで自分自身の自己開示をする。なにゆえカウンセリング心理

学なのかを自身を素材にして明らかにしているのだ。陸軍幼年学校での教育について語る場所は、とても興味深い。そして、大学のできごと、挫折感、アメリカ留学中の質問に対する答えと続き、それらすべてがカウンセリング心理学へと結びついてゆく。

さて、私がこの本を紹介したいと思うに至った理由が二つある。

「私は、カウンセリングを受けなければならぬほどおかしくなっていませんから、話すことは何もありません」この言葉は約10年の間、学生カウンセラーとして務めさせていただく中で、何人もの学生から何度も聞いた言葉だ。もちろん、心理療法の訓練を受けた人たちが心理療法をするために行うカウンセリングもあるが、その前にカウンセリングによって解決できることがある、専門的な治療が必要かどうかを判断できるカウンセリングがある、というようなことをわかりやすく説明してくれるものはないかと。それが本書だ。

心理学については発達心理学、学習心理学、犯罪心理学、教育心理学など、それぞれの分野で多数あり、大学の授業科目にもなり学問としても確立されているが、カウンセリング概論という科目はあってもカウンセリング心理学の科目はごく限られた学部でのみ開設されているのが現状だそうだ。本書では「カウンセリング心理学」がなんぞや、ということを明らかにするために、隣接領域との比較をしている。特に臨床心理学との比較によってその差を際立たせている。『臨床心理学は病理的パーソナリティ（神経症・性格障害・精神病）の研究と治療が主な守備範囲』と『カウンセリング心理学は、問題を抱えた健常者および問題を持っているわけではないが今よりも更に成長したい健常者を主たる対象』として『前者は治療（cure）志向であるが、後

者は問題の解決・問題の予防・行動の発達（care）をそれぞれ志向するものである』という識別は、とてもわかりやすい。前述の例で言うと、学生は臨床心理学的な立場で発言し、私はカウンセリング心理学的立場で向かい合っていた。話すことは何もないと話してくれることで、話したくないという意思表示も受け取りながら。これからは会話拒否されたら、「本書を読んでからまた来い」と言ってみようか。（笑）

一方、本書ではカウンセリング心理学の実践法として、『職場—部下を育てる、教育—子どもの心を育てる、家庭—結婚を育てる、社会生活—人間関係を育てる』の4つが示されている。これは、分かりやすい表現で、役に立つ知識が書かれている。しかし、単なるハウツー本ではない。

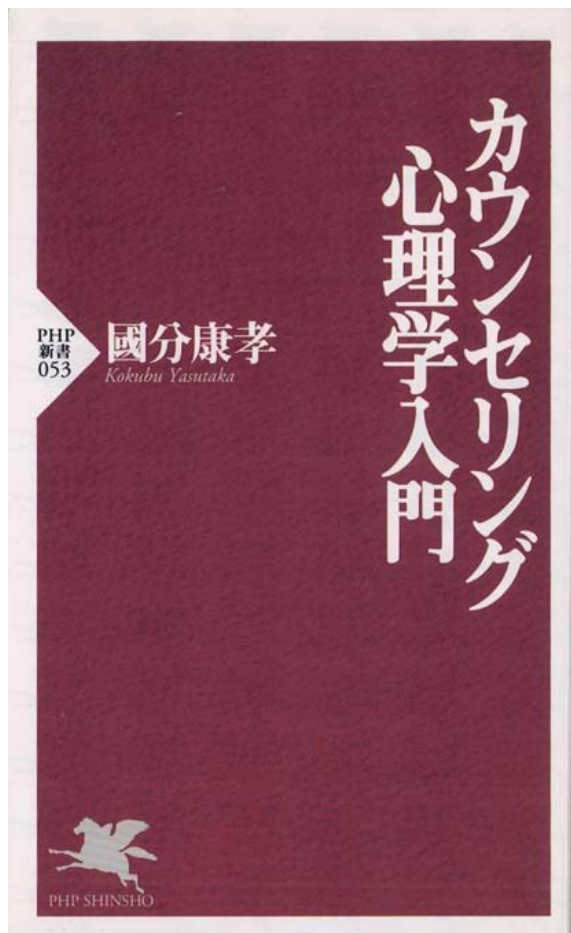
人間関係を持つ能力がある人は、自分を開く能力がある人だそうだ。自分を開くとは、自己開示能力のことだ。自己開示には三つあり、いやなときにはいやなどと自分の感情を語れる、自分はいかかしくしかじか、こういう考えを持っていると語れる、そして、子どもが生まれたなど自分の事実を語れることだそうだ。これは、自分をありのままに受け入れないと、自己を語れない。カウンセリングを受けたくなるくらい、へこんで落ち込んでいることを受け入れ、許せるか。難しいことだと思うかもしれない。だが本書は言う。『自己を語れる人が、人が寄ってくる人』だと。

同様に、さまざまな行動を学習するには、模倣がよいと。社長になる人となれない人の違いは、若いうちにいい上司にめぐりあい、その人の考え方や対処の仕方を学んでいるかいないか、だそうだ。

本書を紹介したくなった理由のもうひとつは、ここにある。私にとって模倣したくなる、なりたいた自分を重ねて考えられたからである。

自己開示の方法も、例のあげ方も、分かりやすく、取り入れたいと思わせる。もっともつと勉強したくなる。真似したくなる。

あらゆる人間関係を対象とするカウンセリング活動を研究する、カウンセリング心理学の成果は、いまや専門のカウンセラーだけではなく、教育に携わる親や先生、管理職、ナースなどあらゆる職業の人々に幅広く活用されていることを本書によって理解し、ちょっと相談してみようかな、と思った時にはぜひとも本校のカウンセラーも活用していただくことを要望し、本書の紹介とする。




---

### 編集後記

今後も本校総合情報図書館において、蔵書展示等を実施していく予定ですので、より多く利用者の方々に見学していただけるよう、総合情報図書館員一同お待ちしております。

編集庶務担当

NADAL Bulletin Vol. 25, No. 1 防衛大学校図書館だより 2011. 1. 11

発行及び発行人

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校総合情報図書館 Tel. 046-841-3810

館長 鎌田 伸一

編集委員

新井 重信 (体育学教育室)

糸賀 紀晶 (航空宇宙工学科)

講初 靖 (国防論教育室)

編集庶務

内藤 明生 (総合情報図書館事務室)

連絡先

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校 総合情報図書館事務室

「図書館だより」事務局

Tel. 046-841-3810

FAX. 046-843-3818

---